

萩

Vol 13

ものがたり

川柳中興の祖

井上剣花坊

井上剣花坊
井上信子
夫妻川柳碑

玉境をふりぬ草の雲はれ今い

信子

てれいつてんをほりた人ほりて

信子



井上剣花坊顕彰会 監修・編著



発行所 氏寄贈

シリーズ
菰
ものがたり
⑬

川柳中興の祖

井上剣花坊

けん か ぼう

井上剣花坊顕彰会
大庭 政雄 監修

序にかえて

発行済の「萩ものがたり」を見ますと、吉田松陰・高杉晋作・長州ファイブと幕末維新期の人物をテーマにしたタイトルが続きますように、萩といえば明治維新の胎動の地としてあまりにも有名です。一方、文芸のジャンルで「川柳中興の祖」と呼ばれた井上剣花坊という川柳界の巨人が、この萩の出身であることは、地元萩市民の間でもあまり知られていませんでした。

剣花坊は、明治三年（一八七〇）萩市江向に生まれ。地元木間小学校の代用教員、山口の新聞記者を経て、明治三十六年（一九〇三）上京して日本新聞社に入社、明治三十八年（一九〇五）柳樽寺川柳会を組織し機関誌「川柳」を創刊、新しい川柳を提唱します。剣花坊の門下は全国各地に広がり、川上三太郎、村田周魚、雉子郎の川柳名を持つ作家吉川英治もいました。

この本の前半は、新川柳界の総帥と仰がれた剣花坊について、川柳愛好家・山本儀雄氏（雅号…甲生 山口市大内在住）が平成十年から機関紙に寄稿された文章をベース（部分割愛あり）に、編集部にて文献資料等により補足・加筆し、剣花坊の生涯とその主張を紹介しています。研究者でもない一介の川柳愛好家が、老体に鞭打って監修したものですので、不備等が多々あるかとは思いますが、何卒ご容赦賜れば幸いです。

後半は、萩市内にある剣花坊の句碑を、写真中心に巡る構成としています。中央の川柳界では著名な剣

花坊も、地元萩では知る人も少なく、句碑は昭和四五年に剣花坊誕生百年を記念して建立された一基のみ。それも、倉敷市の川柳愛好家から「句碑一基 建てよと萩へ もの申す」と皮肉られて建てたもの。剣花坊没後六十五年の記念すべき年（平成十年度）の全日本川柳大会の開催地を、萩に誘致成功したことをきっかけに、全国大会開催までに最低七基の句碑を建立すべく、当時の萩市観光協会の会長でもあった野村市長に「井上剣花坊句碑建立の会」の会長になつてもらい、十基を僅か一ヶ年で建立、大会を成功裏に無事終えることができました。その後、「建立の会」を「井上剣花坊顕彰会」に発展的に改組、現在私がその会長を務めています。

平成十八年、第二十一回国民文化祭の山口県開催が決まり、文芸祭（川柳）の開催地は萩市に即決しました。国民文化祭までに二十基を目標に、平成十六年より句碑建立活動を再開し、合計二十基への増建を文化祭の半年も前（平成十八年三月）に達成することができ、二十一基目となる句碑もまもなく除幕の運びです。この場を借りて、句碑建立に際してご協力頂いた皆様に心より感謝の意を表します。

また、この本をまとめるにあたってご協力頂いた山本儀雄氏・進藤浩氏（雅号…竹生 萩市堀内在住）、編集を担当頂いた中澤さかな氏、貴重な史料や写真を提供頂いた多くの方々にも、併せて感謝申し上げます。

平成十八年九月

井上剣花坊顕彰会会長 大庭 政雄（雅号…華洋）

本編の監修者…大庭政雄氏は平成十八年九月二十七日、九十二歳でご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り致します。告別式では、「天国で 剣花坊氏と あいまみえ」「顕彰の 句碑を残して 黄泉の道」など、川柳仲間からの弔句が多数紹介されました。【編集部】

目次

川柳とは……………6

第一部 剣花坊の生涯

剣花坊その幼年期、青年期……………8

信子との結婚……………10

剣花坊の妻「信子」の若き日……………12

偉大なる川柳人 剣花坊の誕生……………15

剣花坊の晩年……………19

新川柳に対する剣花坊の主義主張……………23

持って生まれた自由主義、平民主義……………28

吉川英治と剣花坊……………30

女流柳人の先達者―井上信子のこと……………37

第二部 剣花坊句碑

句碑の地図・句碑一覧……………42

何よりも 母の乳房は 甘かりし……………45

飛びついて 手を握りたい 人ばかり（剣花坊）……………46

国境を 知らぬ草の実 こぼれあひ（信子）……………46

後五百年 凡駒生まれて 又千里……………47

憧れを 画がけと空は ただ着し……………48

突き進む にぎりこぶしへ 当たる風（剣花坊）……………49

八十年 洗ひ晒しに 堪えた生地（信子）……………49

親といふ 宝はみんな 持ってゐる……………50

絶頂で 天下の見えぬ 霧の海……………51

見ただけで、碑文は読まず 皆通り……………51

新しい 心になりぬ 初日の出……………52

黎明に ひとり座って 神を待つ……………53

いつばいに よろこびを吸ふ 朝の窓……………54

結び切る やがてを落つる 花の露（剣花坊）……………55

何ものの 在すか西の 懐かしさ（信子）……………55

名剣に なるに火に入り 水に入り……………56

巣立ちした あとははじめの 二羽になり……………57

伊達巻で 朝とひるとの 飯を食い……………58

偉大なる 存在なりし 松下塾……………59

紅葉ほど 小細工をせぬ 八つ手の葉……………60

活眼を ひらくとゴミが 眼にはいり……………61

百までも 生きて百度の 大晦日……………62

幾億の 星の中なる 夫妻星……………63

あの船の どれにも帰る 港あり……………64

永遠を 抱けばいのちも 暗らからず……………65

剣花坊 略年譜……………66

●表紙写真 萩市役所前に建つ井上剣花坊夫妻の句碑
●裏表紙写真 萩市江向の剣花坊誕生地に建つ句碑

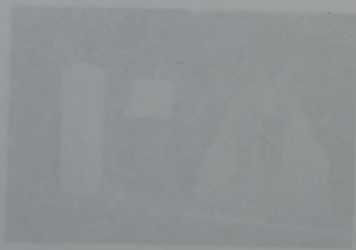
川柳とは

川柳にあまり馴染みの無い方向けに、川柳の概要をまとめています。

川柳とは、五・七・五の音を持つ日本語詩の一分野。口語体が主体であり、俳句のように「季語」や「切れ」の制限もない自由な形態。同じ五・七・五の音を持つ俳句とともに、その源は俳諧。付け句から七・七をとった五・七・五として独立した。江戸時代の俳諧師・柄井川柳が『誹風柳多留』を撰集して盛んになったことから、「川柳」という名前で呼ばれるようになった。同時代は、「うがち・おかしみ・かるみ」という三要素を主な特徴とし、人情の機微や心の動きを書いた句が多かった。その後『誹風柳多留』は毎年刊行され、幕末まで一六七編を数えた。寛政の改革では政治、博打、好色といった風俗を乱す句が『誹風柳多留』から削除されるなどの検閲がなされた。江戸時代末期には、懸賞川柳が大衆迎合の言葉遊び、皮相的な作風に陥ったことから、狂句と称されたこともあった。明治の中頃から昭和初期に掛けて、川柳中興の祖とよばれる井上剣花坊・阪井久良伎らにより、墮落した川柳を民衆詩として再興。現代では「俳句」が風景や季節の移ろいのなかから感じる感興を写生するとすれば、「川柳」は人間の行動や想いのなかから生ずる感興を切りとる「言葉」あるいは「詩」とされている。

第一部

剣花坊の生涯



剣花坊その幼年期・青年期

井上剣花坊は本名幸一。明治三年（一八七〇）六月三日、山口県萩町の江向（えむかい）という屋敷町に生まれた。父は井上栄祐、母はたに（毛利家世臣三井七之助の娘）、一人っ子であった。家は代々毛利家に仕えた家柄で遠く戦国時代にさかのぼると、井上党の名族として聞こえていた。毛利元就の陶氏討伐に際し、これに反対したため、元就に誅族（しゅとく）されたといわれる。この時、現井上家の祖である井上元吉が、元就の近習として仕えていたため、この井上系だけが辛うじて難を免れた。その後、元就は尼子氏との戦争に敗れて主従七騎で落ちたが、井上元吉がこの七騎のなかにおり、元就の馬前で華々しく討死した。その功勞にとつて、断絶していた井上一門の再興が認められ、幕末、明治維新まで続いた。

剣花坊の祖父井上八郎右衛門光武は、大組の証人という相当重い役柄に就いていたが、部下のある者の奸曲（かんきよく）にあつて、家禄は半減され、身は隠居を命ぜられた。さらに栄祐（剣花坊の父）は、長州の内乱の時、保守党に



▶ 剣花坊誕生地（萩市江向）にある句碑

加担していたため、尊王倒幕派（そんおうたうもくは）が勝ち組となつて明治政府を牛耳つた時、政府に仕えず、さればといつてなすこともなく、零落していった。ちょうどその頃、明治三年（一八七〇）、剣花坊が生まれたのであつた。父四十歳、母三十二歳。結婚後十四年目の一粒種であつた。幼名は七郎。井上家何代か前に七郎という者がいて、不幸・病弱・短命であつたため、この子が長じて「幸い」であれ、「一人者」たれの思いをこめて幸一と改名されたという。幼少時代は、一人っ子で甘やかされたということもあっただろうが、何よりも家庭が暗かつたのだろう、臆病（おび病）で泣き虫であつたという。

ところが長ずるに及んで、たいへんな暴れ者になつてきた。「井上の幸ちゃんときたら手がつけれない」という評判だつた。角力（すもう）取りのような大男になるのだから、体力がつくとともに、学校にあがることもできない家の零落に反撥したのだろう。

明倫小学校をでてから苦学して地元・木間小学校の代用教員となり、かたわら、神代大介の「遊学塾」で漢学を学んだ。年譜によれば、「撰ばれて塾頭となり、神代氏の代稽古を勤む」とある。

信子との結婚

井上剣花坊は、十七歳のとき東京へ出たが、病氣を得て翌明治二十一年（一八八八）には萩へもどっている。東京へ出たのは遊学の志であったのである。明治二十三年（一八九〇）、二十歳になり、萩郊外の木間小学校に就職している。明治二十五年（一八九二）に山口に出て鳳陽新報（のちの長州日報社）に入社した。そして、現在の山口労働金庫東隣に居を構えた。そして、やがてこの新聞の主筆になる。このころ、最初の妻トメと結婚したものである。明治二十八年（一八九五）に次男鳳吉、三十一年（一八九八）に三男亀三が生まれている。三男を出産したとき、産後が悪く明治三十一年（一八九八）十一月トメは亡くなった。

なお、父栄祐は明治二十四年（一八九一）、剣花坊二十一歳のとき亡くなっている。

剣花坊は遠縁にあたる岡信子を懇望し、明治三十二年（一八九九）に信子と結婚した。信子夫人の回想談によれば、「結婚の翌年に東京にでてき

※鳳陽新報（のちの長州日報）
明治前期の山口県内発行新聞は、「山口県新聞」、「鴻城新聞」、「馬関物価日報」、「山口新報」、「防長新聞」の五種である。他にも「時報」、「新報」という名称の新聞雑誌もあった。明治二十七年（一八九四）二月「鳳陽新報」が治安妨害をもって発行停止された。森有礼文相を暗殺した兇徒西野文太郎の非行を曲庇賞揚したためという。五月には「鳳陽新報」発行人兼編輯人井上幸二、印刷人小倉久吉が、官吏侮辱の告訴を受け、重禁固一月、罰金五円の刑に処せられた。

まして」（「婦人朝日」昭和二十六年三月号）となっていて、二度と郷里には帰らなかった。剣花坊の上京は、政治と絶縁したことにあるので、信子との結婚が重要にかかわっていたのではないだろうか。信子は後妻に懇望されたとき、政治と手を切るように条件をだしたのではないだろうか。これはどこまでも推測であるが……。

剣花坊は筆禍で投獄されており、政治の煩わしさを母親が嘆き悲しんだであろうことは容易に想像でき、それを傍らで見ていた信子も母親に同情しただろうし、信子自身、政治屋を好まなかったと思われる。

剣花坊・信子の愛娘大石鶴子氏によれば、剣花坊と信子は遠縁にあたっていた。信子の家柄の方が格上だったという。剣花坊が生まれたとき、信子の母みちは、一歳の信子を背負い、お産の手伝いに行った、そのような姻戚だった。剣花坊が「長州日報」の主筆として活躍していたさなか、先妻トメに先立たれたわけで、残された三人の男の子の面倒は祖母のたにがみていたが、母なき惨状は言葉にも尽くし難いものがあつたと、信子は後年、愛娘鶴子に語っている。ということは、信子はその惨状を見るに見かね、のちに姑となるたにの手助けをしていたらしい。当時信子は、山口赤

※大石鶴子

（一九〇七—一九九九）
剣花坊・信子夫妻の次女にあたる柳人である。剣花坊の「柳樽寺」系俳句を今に伝えている一人といえよう。「転がったとこに住みつく石一つ」「政治家の脳天を射る星一つ」

十字病院の看護婦をしており、剣花坊より一つ年上、三十歳であった。

剣花坊は信子の手助けを大いに喜んだばかりか強い恋愛感情を持ち、信子に求婚した。信子はいったんは断ったという。しかし剣花坊は熱をあげ、病院長を説得する手にでて、結婚できなければ腹を切るという切り札まで出したという。

剣花坊の妻「信子」の若き日

その信子は、次女鶴子によれば、二十歳頃、結婚に失敗し実家に帰っていた。その時、父に、「もう結婚しません」と言いたく怒られたという。夫は同郷人で職業軍人であつたらしく、たいへん温和な人だつたという。離婚の原因ははっきりしないのだが、時は憲法発令、国会開設にあたり、世をあげて国づくりのときで、東京へ東京へと新天地を求めて若者が去つ

ていくのを見て、信子は無為でいる毎日が矢も楯もたまらない気持ちになつたらしい。結局、その気持ちを抑えることができず、子なしのまま実家に帰っている。狭い町のこと、口の端にのぼつたのは間違いない。たまたま日清戦争がはじまり、お国のために何かしたいという気持ちから赤十字の看護婦を志願しようと、信子は待望の東京に出て勉強をし、看護婦になった。彼女が萩から東京に出る時、夫だった人が見送りに来ていたというのだから、夫婦の間に特に問題があつたのではないらしい。

信子は後に日露の戦役に従軍し、勲八等宝冠章をもらっている。剣花坊は終生、「信子は勲八等だからネ」と明治天皇からの褒賞ほうしょうに頭が上がらなかった。

このように、信子には結婚歴があり、乙女の抱く結婚に対する幻想などは卒業していた。実際の結婚がどんなものか百も承知なのである。しかも姑があり、先妻の子が3人もいるところへの後妻である。結婚をしぶるのは当然であつた。その上、信子は自立した女であつた。しかしとうとう剣花坊の求婚の押しに根負けして結婚を承諾したのは、信子が人間・剣花坊に惹かれたからに違いない。剣花坊と信子の間には長女竜子（明治三十四



◀ 左から次女鶴子・長女竜子・剣花坊（大正4年頃）

年生)、次女鶴子(明治四十年生)の二人の娘が生まれている。

結婚した翌年(明治三十三年 一九〇〇年)、剣花坊は新聞社を辞め、上京した。姑は八十歳の長寿を保ち、剣花坊・信子にみとられ安らかに一生を終えた。

剣花坊は東京で雑誌「明義」の記者になり、文芸欄を担当したが、明治三十五年(一九〇二)、招かれて新潟県高田市の「越後日報」の主筆となった。翌三十六年(一九〇三)、越後日報を退社、直ちに上京、日本新聞社に入社した。ここまですが剣花坊前半の略歴である。この日本新聞社入社が、思いもよらない川柳人剣花坊を誕生させることになった。これまでは、「井上秋剣」の名前しか使っていなかったため、正確には剣花坊ではなく、井上秋剣の略歴である。

井上秋剣の略歴である。

偉大なる川柳人 剣花坊の誕生

「日本新聞」の編集室に居た頃の秋剣についての記事を見ると、響き渡るような音声と華やかな談話ぶりとは名物だったようである。のみならず秋剣の風采も一種の特徴があったようである。そうとう柄のある体格で、両の肩をいかめしく張って、片方の手でいわゆる片袂をとり、足でバタバタ床を叩くように歩いた。ものを書くときには、左の手で拳固を作り、着物の肩を突き上げて、江戸っ子のいわゆる「ヤツ」を作っていた。風采、態度が任侠伝中の人物のようであつたらしい。彼が剣花坊と名乗って川柳をやりだしてから、同じ編集室で机をならべた長谷川如是閑が、彼のことを川柳によって戯れに示したことがあつたらしい。

あの音は秋剣きたると覚えたり

秋剣は漢文張りの文章が上手だったので、それで相撲の記事を書いて好評を博した。日露戦争が勃発すると、殆どすべての記者が従軍して、留守は古島編集長(古島一雄氏)と、四、五名きりで、秋剣も留守組だった。

※日本新聞社

明治前期の新聞は、いわば政争の武器としての新聞であった。最初は自由民権運動のなかで政党機関紙としての新聞が多く生まれるが(郵便報知新聞「自由新聞」など)、政府の厳しい言論統制のなかで一八八〇年代後半には衰退、それにかわって不偏不党を標榜した政論新聞が登場、その代表的なものが日本新聞(他に「時事新報」や「国民新聞」など)。

※古島一雄

(一八六五—一九五二) 明治、大正、昭和期の日本のジャーナリスト、衆議院議員、貴族院議員。一念、古一念と号す。雑誌・日本人(のちに「日本及び日本人」に改題)の記者となり、ジャーナリズムに身を置く。さらに日本新聞の記者となり、日清戦争では、同じ日本新聞の記者であつた正岡子規に従軍し戦況を報道した。

従軍記者から送ってくる文書を、片っ端から秋剣ばりの漢文調に書き直したので、昼も夜も大童^{おわらわ}になっていた。その漢文ばりの従軍記は「日本」の売りものになり、さすがに「日本」の記者たちはみな文章家だと賞賛された。古島編集長は、そのころから犬養の懐刀^{わいのう}といわれていたが、すこぶる機知にとんだ人で、文章もうまく、書の如きも、犬養のそれよりもいいと評されるくらいだった。秋剣に川柳を始めることをすすめたのは即ちこの古島一雄氏だった。古島氏は川柳に古くから興味をもっていて、書物なども多少持っていた。それを秋剣に提供して、「この新聞ではかつて、正岡子規が新俳句をおこしたのだが、こんどは君がここで新しい川柳を興したらどうか」と川柳をやるようにすすめたのが、後の、大剣花坊を産むそもその発端であったと長谷川氏は「川柳人」一九三四年十一月剣花坊追憶号^{おぼえごう}のべておられる。

剣花坊の担当した川柳欄「新題柳樽^{しんたいやなぎだる}」は狂句全盛の渦中にあつて、狂句一派の嘲笑やからかいに晒されながらも人気を得、わずか数年でその位置を不動のものにする。そして明治三十八年（一九〇五）剣花坊は柳樽寺川柳会を結成し、自らを柳樽寺和尚^{わしやう}剣花坊と名乗る。この頃の作句を句集から拾ってみる。

※狂句

江戸時代末期には、懸賞川柳が大衆迎合の卑猥で低俗な笑いに溺れる言葉遊び、皮相的な作風に陥ったことから、狂句と称された。剣花坊は、その狂句の野卑猥雑、悪ふざけを、みだりに滑稽の名をもって社会に跋扈するものとして完全否定した。

ら拾ってみる。

『はじめての川柳句会に』との附注で、

幽霊が手さぐりで出る暗いこと

冷飯の孫は証目の下駄を履き

かせぐ気になったとぬかす年の暮

縁切りが来た夜虫歯が痛みだし

編みかけの帽子かたみの子が被り

年々歳々人同じからず年の暮

その後、門下は全国に広がり、柳樽寺派として、川柳界の最大勢力となっていく。同年十一月三日（天長節）、柳樽寺川柳会の機関紙「川柳」第一号全六十四ページを創刊。「僕のそもそも明治中期の新川柳興立が、この川柳なる特殊な人事詩を、新俳句に対する新川柳として、芸術界へ、文学界へ、詩世界へ一石を投ぜんと企てた」（昭和四年・川柳王道論）と後に述懐する。

明治四十二（一九〇九）年、三十九歳で日本新聞社・編集長職を退職、客員となつて引き続き川柳欄を担当、新たに国民新聞や読売新聞の川柳欄



※大正川柳

井上剣花坊が主宰した「柳樽寺川柳会」の機関紙。昭和に入つて「川柳人」に改題され、平成十一年（一九九九）まで続いた。

の担当となる。明治四五年（一九一二）機関紙「川柳」を「大正川柳」と改題する。

二重橋涙のあとの草の色
は、明治天皇崩御の句。

日本新聞社退職により時間の猶予を得、精力的な執筆・言論活動と全国各地への川柳行脚が始まる。「拙者は大石内蔵助ぢや」（大正二年・一九一三年）、「赤裸々の大石良雄」（大正三年・一九一四年）、「新川柳六千句」（大正六年・一九一七年）、「川柳を作る人に」（大正八年・一九一九年）、「剣花坊句集・習作二十年」（大正十二年・一九一三年）、「江戸時代之川柳」（昭和三年・一九二八年）と、精力的に刊行を重ねる傍ら、文芸誌を中心に民衆詩としての新川柳確立のため、自らの主張を多数執筆している。昭和五年から晩年にかけては「川柳百七十年史」の執筆に専念する。

大正十二年九月一日の関東大震災では自宅を消失、この時、岡田三面子博士より借りていた「万句合写本」ただ一冊を抱えて災禍を逃れた。自身の被災経験「大震大火に逢ふの記」の一文を草している。句集をみると、この関東大震災に関わる句が五十三句ある。

※「万句合」

江戸時代・宝暦年間頃より、俳諧の流れを受けた「前句附」が盛んに行われ、その題を捨て「句附」の入選作を半紙一枚の刷物として出版したもの。川柳が短詩文芸のジャンルとして形を成してきたのは、この頃であるという。

神などは居ず人の子はさいなまれ

地震の朝生まれた子其の夜死に

落城の火を足元の灯りにし

など悲しい句が多い。下渋谷の白神宅に一時避難し、翌年杉並高円寺に転居する。

剣花坊の晩年

大正四年（一九一五）日本新聞社の客員を辞したことを契機に、全国各地の柳友や門下を訪ね、積極的に全国各地を歴訪している。略年譜から拾ってみると大正四年（一九一五）は関西方面、大正七年（一九一八）には能代・大阪・東北方面に、翌八年（一九一九）は京阪方面と中国朝鮮にも。大正十年（一九二一）は中国・九州行脚、十一年（一九二二）は金沢方面



▶機関誌「川柳人」
昭和8年11月号表紙

へ、大正十四年（一九二五）は満鮮に旅し、十五年（一九二六）は再び東北方面に川柳行脚。訪問する全国各地で川柳愛好者の熱烈な歓迎を受けたという。

大正十年（一九二一） 中国九州方面行脚の句
近所でも草履を穿けば旅になり

寝台車向三軒両隣

川一つ向ふは蜻蛉釣った村

諸国から来て名人にみんな成り（長崎）

大正十四年（一九二五） 満鮮旅行

未だ骨が出ると旅順の山で聞き

だんだんに支那と別れる長い橋（鴨緑江）

大正十四年（一九二五） 米沢にて

賢君の徳大沢に溢れたり

昭和五年（一九三〇）に訪れた岡山県津山市には、児島高徳の故事（太平記）を偲んで剣花坊が詠んだ

院庄六百年の涙雨

の句碑が立つ。

故郷萩には大正十年（一九二一）、なんと三十年ぶりの帰郷であったという。萩市役所前の句碑

飛びついて手を握りたい人ばかり

はこの時の作。この句には『故郷の山河を車窓より』の附注がある。萩の長寿寺で「日本国民詩としての川柳」を講演、剣花坊の帰郷を期に、萩の町でも川柳に関心を持つ人が多くなり、ちょっとした川柳ブームになった。昭和九年（一九三四）三月一七日、郷里・萩の市歌の選者として招かれ、軽い脳溢血のため肢体に不自由ながらも帰郷。王政復古七十周年記念行事の一環として、三月一九日夜、萩市公会堂にて千名を超える聴衆を前に「藩論統一に関する歴史」と題して二時間半にもおよぶ大講演をこなした。萩での講演を終え、その帰路、九州・山陰・山陽の柳友を歴訪。

昭和八年（一九三三）八月、動脈瘤の疑いがあり大学病院で検査を受けている。『自分で気づかずのんき呑気な顔してゐるのを、蛇太郎君に肢体の異常を指摘され、翌スグ大学病院に診察を受けると、ともかく驚く血圧二百』の附注で詠んだのが



院庄六百年の涙雨の句碑
（岡山県津山市）



大阪中央放送局でラジオ出演する剣花坊

気づかないやうに忍び込んだ病魔

『六十やそこらで若死にしては困ると、酒、其外を絶対禁じたが、書く、読む、喋るだけは例外』と、

百まで活きるほどの血圧

とますます氣力は健在。

昭和九年（一九三四）九月四日、執筆と静養のため一夏を過ごした鎌倉建長寺の正統院にて、脳溢血を発病、十日肺炎を併発し十一日午前五時に死去。享年六十五歳、法号は劍花院婦幸道一居士。葬儀は東京を始め全国各地の柳人や文壇の著名人を中心に多数の会葬者で建長寺空前の盛儀となった。逝去の年の元旦、衝立に試筆した

後五百年 凡駒生まれて 又千里

が、この世に止めた名残の句。

建長寺さすが和尚の死に所

は劍花坊と並んで川柳中興の祖と呼ばれる阪井久良伎の追悼句。同年十一月八日、劍花坊追悼全国川柳大会が盛大に開催された。晩年を過ごし墓所でもある建長寺領内、嵩山門と鐘樓の間には、劍花坊の代表句とされる

※建長寺

鎌倉五山第一位の臨済宗建長寺派の大本山。建長五年（一二二五）北条時頼が蘭溪道隆を開山の禪の専門道場。最盛期には塔頭が四十九院あったが火災により焼失。現存する建物は江戸時代以降に再建または移建されたものである。総門、三門、仏殿と一直線に並ぶ伽藍の周囲を一〇〇の塔頭寺院が取り囲む。寺宝も豊富で木造漆塗りの須弥壇、木造北条時頼坐像などの国重文がある。絵画、書の優品も多数。境内は史跡。



大正天皇崩御の時の作句

咳き一ツきこえぬ中を天皇旗の碑が佇んでいる。

新川柳に対する劍花坊の主義主張

井上劍花坊の略歴については先に述べたが、ここでは、彼自身が創刊した「大正川柳」（大正九年（一九二〇）十一月号（同誌百号記念号））に載った劍花坊の主張を紹介しよう。

私の主義は、平民主義です。自由主義です。人間としては上、御一人を除くの外は、決して貴賤の差別はないという簡単な主義です。

私は長州に生まれました。吉田松陰や高杉東行（晋作）や寺島刀山（忠



▶ 咳き一ツきこえぬ中を天皇旗の句碑（神奈川県鎌倉市）

三郎)は親族関係もあり、また、その人たちの主義、性行に教化、陶冶された関係もありますから、すべてその人達の心を以て心としておりますが、この人達はいずれも尊王主義であり、同時に平民主義でした。自由主義でした。

この人達が死んだあとに、この人達の志を継ぐと唱し、この人達の志を違うた階級主義、官僚主義を打ちたたてた同郷の先輩達には、私はどこまでも反対しました。それがためにいろいろ迫害を受けました。が、その自由党が、長州先輩と肝たん相照らしてだんだん官僚主義になってしまったので、私は脱党しました。それきり、政治界の人達の頼み難きにあいそをつかし、文学界の方へ入りました。

東京にきてこのかたは、絶対に政治というものに関係せず、これまで天下国家を論じた筆を、専ら、詩、歌、文章に託することにしました。

しかしながら持つて生まれた自由主義、平民主義は、この文学界の方に来てても忘れずに、身は長州でありながら、決して同郷先輩の門へ出入りしません。東京で唯一の親族が、やっぱり同郷人である(注、従兄の男爵寺島秋介をさす)。これにたよればいかなる高位高官、権門勢家の軒の近づ

くことができましたが、それはしなかった。

こんな風で、私は川柳をやりだしてから、私の仕事に興味を持ち、内々で補助をしようとしていた曽根荒助、杉孫七郎二氏の好意も、その人達の死後に聞かされ、一言の札を言わずに済まなかったとあとで後悔したくらいです。

しかし私はこれを好い事だと思いません。といって悪い事だとも思いません。それならなぜ、十八年間、曾て、筆にしたことのない私の過去の生活を川柳の雑誌に書くのか、と聞かれますと、私の新川柳において持っている主義が、やはり、この自由主義、平民主義であって、私が今日、新川柳をどこまでも徹底した民衆芸術にしようという主義が、決して一朝一夕に生じたものではないことをお話しするに必要と思ったからです。

それからこれはつまらない話ですけれども、私は長州の人間であるから、江戸児の専有物たる川柳を云々する権利はないなぞと、豆の如き小さい目で見て、これを口にする小さい人間がいますから(注、阪井久良岐をさす)それに対して言うておく必要があります。これでなおわからずにくだらぬことを言う人には勝手に言わせておきます。

※寺島刀山 寺島忠三郎

(一八四三—一八六四)

忠三郎は、天保四年(一八四三)、無給通土寺島太郎邸の次男として、熊毛郡高水村に生まれる。安政五年(一八五八)、一六歳のときに松下村塾に入り、その後脱藩して京都に上り、政変後も京都に潜伏して情報収集を担当。翌元治元年の禁門の変で長州勢は総崩れとなり、激戦を共にした久坂玄瑞と相対して自刃した。享年二十一歳。

※寺島秋介

(一八四〇—一九一〇)

寺島忠三郎の兄。西南戦争では警察隊編成、陸軍大尉となる。山口土族で吉田松陰門下生のひとり。陸軍大尉奥羽征討参謀、大警部、元老院議員、貴族院議員など。男爵。NHK大河ドラマ「花神」にも登場する。

※阪井久良岐

(一八六九—一九四五)

本名、坂井 辨。今日の川柳発展の基礎を築いた人物で、井上剣花坊師と並んで「川柳中興の祖」と称されている。元々国学、漢学を学んでいたが、明治一七年九州地方を漫遊した際、藤堂男爵家において五世川柳編の「絵本柳多留」を読んで川柳に志向する。明治三〇年「日本新聞」に入社、そこにいた正岡子規と歌論で衝突したが却って親交を深め、子規の感化を受け川柳の本格的な研究を決心。明治三六年「川柳梗概」発行。川柳中興の第一声となる。明治三七年我が国最初の川柳会「川柳久良岐社」創立。本邦初の川柳会開催。

以上で、私が新川柳に持っている主義は、この短き詩を徹底した民衆芸術たらしむることと思います。

即ち、上、御一人を除くのほか、人間に貴賤の別はないという簡単な主義を、詩人の口から言えばそうなるのです。

詩の神は、人間に、貴賤・上下・賢愚・貧富・都鄙・長幼・識不識・学無学・才不才・文無文の差別はつけられはしまいと思います。

ところが、従来の詩にはそれがあります。詩の心は何人にもあるけれど、これを表現して詩とするものは、詩人という、特別階級の人間でなければならぬということになっていました。最も民衆に近い民衆詩人の例をひきます。米国のホイットマンは、近世唯一の世界的民衆詩人です。しかし路傍の「草の葉」に、チラチラ見える花にも大いなる愛を持ったという彼の民衆に同情ある詩も、彼の如き、大詩人にならなければ歌われません。するとやはり、他の多くの民衆は、この大詩人を待つてはじめて自分を表現することになるのです。

これを政治にたとえますと、民衆は政治を解してはいるが、自ら政治することはできない。大政治家という優れた人間が、必ず上に立って政治を



▶ 浴衣姿の剣花坊

やらねばならぬ、というようなものです。なるほど、そうした実際の場合もあるにはあります。専制政治の国は昔からそうでした。

上に立つ政治家は、自分が政治をしてやらなければ民衆は幸福を享受することはできない、と思い、民衆の方でもやはり大政治家に依頼して、何もかもやってもらった方が面倒くさくなくていいと思つたのです。それもいいかもしれませんが、それでは民衆はいつまで行っても独り歩きできない嬰兒です。けれども民衆は生長します。民衆の政治は、民衆自身でやるところで立憲政体もでき、共和政治もでき、終には、二・三の国のような、極端な主義で政治をする国もできました。

それがいずれに利があるか、害があるか、私は前に申したように政治論から絶縁していますから一言も申しませんが、詩の議論になれば、二言も三言も、千言も万言も、言わねばなりません。

民衆は自ら歌うことができます、歌えば必ず他の大詩人の歌った詩を歌って満足する。というのではどうももの足りません。民衆のだれもが詩を作り、そうして自分のつくつたものを自分で歌うのが当然だと思います。否、それが真に民衆芸術というものだろうと考えるのです。〔大正川柳（大正

九年十一月号)より引用]

持つて生まれた自由主義、平民主義

「人間としては、上、御一人を除くの外は、決して貴賤の差別はない、という簡単な主義」、「私の主義は平民主義です、自由主義です」。

なんと明快な主義主張であることか。「上、御一人」という負性^{ふせい}に「それを除く」という負性を掛けることによって、平民主義、自由主義がみことな正性^{せいせい}にのみがえる。日本独特の国家社会主義の構図である。日本共産党が、戦前、天皇制廃止を綱領にかかげたことで、全体を負性に追い込み孤立してしまったのと反対の構図である。

彼はその理論づけを、「持つて生まれた自由主義、平民主義」といい、いわゆる理論化しない。理論^{はかり}くらい儂いものはない。AとBとの理論闘争

で、どちらかが相手に納得し同意したということは、この世の初めからこの世の終りまでない。裁判における検事と弁護士の関係である。どちらかが、相手に、おそれいましたと納得することは絶対がない。逆に、反対することで互いに自己の存在を主張する。Bの理論はAが在ってはじめて反論として成立したもので、AがなければBも存在しないものである。

井上剣花坊の自由主義、平民主義は、すでにある封建主義に対立してあるものではない。「持つて生まれた自由主義、平民主義」である。この内発性の強さは比類のないものだった。後にプロレタリア川柳戦争が起ったとき、「川柳王道論」を唱えてどちらにも加担せず、その根柢を「大常識」にあるとした内発性である。

彼は代議員制度を信用しない。「それでは民衆はいつまで行っても独り歩きできない嬰兒です」という。他人に頼まないで、独り歩きせよという。これを彼は民衆詩に適用している。詩は大詩人にたのむな。「それではどうも物足りません。民衆のだれもが詩をつくり、そうして自分のつくったものを自分で歌うのが当然だと思います。否、それが真に民衆芸術、民衆詩というものだと考えるのです。

※プロレタリア川柳

若くして川柳革新の旗手として頭角をあらわした鶴彬が階級意識に目覚め、川柳をプロレタリア人民の戦う武器にまで高め、アジア軍事侵略にひた進む日帝に「十二文字」の鋭い刃をつきつけた。一九三七年盧溝橋事件をかわきりとして本格的な中国侵略戦争が進む中、恐れることなく反戦川柳を発表しつづける。

※川柳王道論

昭和四年に発行された剣花坊の著書。その主義主張は、終始一貫しての天皇崇拜主義の立場を崩さなかった長州人の血を色濃く宿している。

ひとりひとりが志を述べよ。それを詩につくり自分で歌え。それが民衆詩だといっている。井上剣花坊は自分の新川柳運動をそう主張した。

大正九年（一九二〇）という時期に、これだけ清新な、内発的な平民主義、自由主義、民衆詩論があったのです。「これならほんとうだ」といまに感じさせる迫力がある。

吉川英治と剣花坊

大衆文学作家、吉川英治に「忘れ残りの記」という文章がある。吉川英治が、生地横浜からひとり立ちして上京した大正初年の社会の様子がよく描かれている。吉川英治の出発が川柳人であったこと、その師井上剣花坊と夫人信子のことが、三十年をさかのぼって懐かしく思い出されている。

（三筋町界限）

浅草三筋町界限は、まだ旧東京の庶民の暮らしが、そっくりそのまま、横丁や長屋の隅々に至るまで残っていた。煮豆屋と荒物屋の横で、四軒長屋が二列になっており、輸出金属象嵌の下絵書きの徒弟として住み込んだT氏の家は、ドブ板のいちばん奥で、蛞蝓の這い痕をもった戸袋やら、ガタビシいう暗い格子戸がそれだった。

どこも六畳三畳二畳台所だけの棟割りだが、それでいて二坪三坪の小庭がみな付いており、目隠し板にハツ手や楓を覗かせ、夏ならば朝顔や胡瓜を絡ませたりして、けっこう庶民の雅懷を愉しむには事足りていた。

それと、隣三軒、前四軒の箸茶碗の物音から、喜怒哀楽の声まで、手にとる如く聞こえ合うので、それぞれの職業、家族、出入までが、一軒のものとして判断される。で、終日、蒔絵師用のじょうばんと称する机に似た物の前に坐って、輸出物の下絵仕事に根気をつめていても、ぼくは倦むことを知らなかった。

俳句を忘れて、川柳を作りはじめたのも、そして当時、日本新聞の客員であった井上剣花坊氏に、とつぜん来訪されて面喰ったのも、その頃の事



※吉川英治

（一八九三—一九六二）
神奈川県久良岐郡中村根岸に生まれた。明治三二年十歳の山の内尋常高等小学校に入学。転居により南区南太田の尋常高等小学校に転校。明治三十六年中退。以後印章店の住込店員、活版工、土建労働者、横濱ドック船具工などを勤めた。十八歳の時、上京し工員などをしながら、日本新聞川柳欄に投稿をはじめ、大正三年二越百貨店が募集した「文芸の三越」に川柳一等当選。柳名を吉川雉子郎。大正一〇年、東京毎夕新聞社に入社。以後精力的に作品を書き続ける。昭和三年文化勲章受章。昭和三七年毎日芸術賞受賞。同年九月七日、癌の悪化により死去。代表作に鳴門秘帖、宮本武蔵、新平家物語、私太王記、新・水滸伝など。

だった。それが縁で休日^{きふじつ}に当たる日は句会へも出た。柳樽寺発行の「新川柳」の同人にも加わったりした。川上三太郎氏の名も同人の中にみえた。だが三太郎氏は上海にいるとかで、その頃はまだ顔を見ていなかった。

裏通り飯のまじった水をまき

雉子郎

(注 雉子郎は吉川英治の川柳人雅号)

(三畳自立)

どうやら、およそ二年後に、ぼくは丁氏と離れて職を持つことが出来た。東京で初めて、自分の畳として持ちえたぼくの根城^{ねじょう}は、下谷西町の髪結^{かむむす}さんの二階であった。梯子段の上り口が三畳、襖隣^{ふすまど}りが八畳である。だが、ぼくが借りたのは三畳だけで、八畳の方には、落語家の夫婦者が住んでいた。

しかしぼくの三畳へも、以来とみに訪問客は多かった。仕事仲間は別として、その頃もう上海から帰っていた川上三太郎氏はすぐ眼と鼻の先の佐竹^{さたけ}にいたし、柳樽寺同人の誰彼^{たれが}だの、談論風発^{だんろんふうはつ}なら、お隣に負けなかった。

(三宅雪嶺)

(剣花坊氏のこと)

句作や江戸文学研究の上で教えをうけたことを除いても、井上氏夫妻からは、個人的にも、並々ならないお世話を蒙^{うけ}った。この事は多年いう折もなかったのでは非書いておきたい。

上京からの御縁^{ごえん}だった。井上秋剣の名で、「中学文壇」その他の文芸誌に、詩や文章の選、また小説評論も書いておられた。日本新聞の上では、三宅雪嶺・福岡日南などと並ぶ社会評論をも見せていたかと記憶する。論文の場合は、剣花坊の号を用いず、必ず秋剣であった。お会いしたのは、上京後だが、その前に、ぼくが何かへ投じた漢詩のことで、返書をいただいたことがある。新体詩が興り、漢詩などはもうかえり顧みる者もなかったせいか、その事は、氏も覚えておられた。

とつぜん、三筋町の長屋へ訪ねて来られたのには、びっくりした。が、そういう見得^{みえ}のない人なのである。長州人の豪朗性^{ごうろうせい}そのもので、いつも書生袴^{かぶつ}の姿、そして手提げ袋の紐を、片手の手首に巻き、体じゅうで笑い、体じゅうで談じる。そして終日でも倦まない。後には、妙にぼくの親父と気が合ったものだった。どこか一脈通じるものがあつたらしい。

※川上三太郎

(一八九一—一九六八)

現代川柳の隆盛に力をつくし「川柳六大家」と呼ばれた中のひとり。吉川雉子郎(後の作家・吉川英治)と共に「大正川柳」の編集に携わる。昭和五年、国民川柳会を創設、「国民川柳会報」(川柳研究)の前身)を発刊。読売新聞時事川柳欄をはじめ、多数の選者をつとめた。

※三宅雪嶺

(一八六〇—一九四五)

金沢市生まれ。東大卒。過激な欧化政策に反対して国粋主義を唱へ雑誌「日本人」創刊。在野から資本家、政府を批判した。

※福岡日南

(一八五七—一九二一)

福岡県生まれ。日本新聞社員。九州日報社長。ジャーナリスト。

※堺 利彦

(一八七〇—一九三三)

日本社会主義運動の父。明治・大正・昭和の三代にわたり社会主義運動の開拓に生涯を捧げた。

お住居は芝愛宕町で、やがて高輪の東禅寺裏へ移った。「遊びに来給え」といわれ、そのどっちへも伺った。よく電車通りの洋食屋露月亭に伴われた。当時における硬派のジャーナリストでもある。実に話はおもしろい。殊に史学家であり、文壇事情だけでなく、政界にも通じていた。ひとり長州だけでなく薩州とか、熊本とか、なお、日本の社会にはどの部門にも閥色の余影があった。剣花坊氏はそれらの閥臭に対しては常に反逆的口吻を弄していた。堺枯川を大いに認めていた。柳樽改革をとえ、新川柳を興し、氏を川柳へ赴かせたものの一因はそこにもあった事かもしれない。「長州人で多少、文化のわかるものは、ぼくと松林桂月ぐらいなものだ。」と言ったりした。画壇の方にも交友は広がった。その桂月氏とぼくとが、以後交友をつづけたのも、剣花坊氏のお宅からであったが、そのほか氏の紹介で聲知を得た人々も少なくない。松居松葉、笹川臨風、小山内薫、水野葉舟、木下奎太郎、与謝野寛、倉田百三、ちよつと思ひ出しきれない程である。

※松林桂月
本名・篤 池
(一八七六年～一九六三年)
山口県生まれ。大雅以来日本人に親しまれてきた文人画の世界に、西洋絵画の流れを取り入れ近代化、新しい感覚の文人画を創造した巨匠であり、最後の文人画家と呼ばれている。

(釜飯と下駄)

忘れ難いのは、初めてお訪ねしたときの事だ。ぼくは鼻緒の切れかかった汚い下駄をはいていた。奥さんの信子女史が、鯉節の釜飯をたいて御馳走してくれた。その味を忘れていない。また、帰ろうと思つて下駄を履きかけたら、ビシャンコな泥下駄が、きれいに拭かれて、切れかけていた鼻緒まで、ちゃんとスゲ代えられてあった。

その井上信子女史は、今もご健在らしい。らしいと言つては御無沙汰の罪、申しわけない。だが、終戦後、高田保が、「ぶらりひょうたん」の一文の中に、信子女子の近作一句挙げて「これが何と、八十に近い老女性の感覚であろうかと、賞めていたことがある。

その句は、たしか、

国境も知らず草の実こばれ合ひ

というのであった。それで御健在を知ったわけだった。

(和尚と花街)

大学の教授と生徒とも、そこらではよく見かけた。あの和尚(剣花坊の



▶左から2人目が若き日の吉川英治、右側で腕組みをしているのが剣花坊

こと」の姿を、その中で発見した。和尚は金持ちを連れていることがある。吉原では最高級の稲本、大文字、河内屋などの長廊下へ、ぼくらの汚い足跡が残る場合は、おおむねそういう天恵な機会であった。

花街では、和尚もしばしば浅黄ウラ扱いをうける。

事実、あの人の特徴は田舎者たることにあった。敵娼（かたがら）の選択をやり手婆に問われた時、言下にこういったことは有名だった。

「ほんとに惚れんでもよいから、惚れたマネをする女をよんでくれい。」

（吉川英治「忘れ残りの記」より引用）

この「忘れ残りの記」は吉川英治が逝去に先立つ七年前、昭和三十年（一九五五）一月から「文藝春秋」に執筆したものである。三十年にさかのぼり、二十代の青春の日、剣花坊をしのんだものである。執筆時、吉川英治六十三歳、戦前の「宮本武蔵」、戦後の「新平家物語」に代表される国民作家という立場にあった。昭和三十五年（一九六〇）には文化勲章を受章している。その吉川英治の出発は、井上剣花坊を師と仰ぐ、川柳人吉川雉子郎であった。

この文章のなかに、英治が二十歳、浅草三筋町界隈の長屋に住んでいたころ、師、剣花坊が訪ねて来てびっくりしたことが書かれているが、英治が二十歳は大正元年（一九一二）で、剣花坊四十二歳である。英治が活写したような庶民と世間を相手に、この年八月、機関紙「大正川柳」を創刊した。この月刊誌は大正の全期間を通じ、鏡のように世相、人心を反映していくことになる。吉川英治は雉子郎の名で「大正川柳」の編集同人になり、剣花坊の愛弟子として、「大正川柳」をささえていった。

女流柳人の先達者 井上信子のこと

信子（一八六九～一九五八）は剣花坊の一歳年上、萩藩名士の家に生まれ、剣花坊とは遠い縁戚関係にあった。明治三二年（一八九九）、山口の赤十字病院に看護婦としていた頃、剣花坊に見初められて結婚。このとき



左から信子・剣花坊・鶴子
（昭和4年頃）

剣花坊は男子三人をもうけた先妻に先立たれた身であった。この縁組みには信子のほうの同情感があったといわれる。明治三十七年、信子は国の要請に応じて日露の戦争に従軍看護婦として働き、勲八等^{くんぱつとう}を得る。川柳の確立を目指した剣花坊は明治三十八年（一九〇五）「柳樽寺川柳会」を創設し、機関紙「川柳」を発行。自宅での句会の準備・応接や機関紙発行の細々とした仕事はもっぱら信子の役目だった。信子が句作を始めるようになったのは、大正六年（一九一七）出版の「新川柳六千句」に

夕からす帰ったあとに子守唄
が載ったところといわれる。昭和四年、川柳革新に賭けた夫の気迫に寄り添った女性川柳最初の「井上信子句集」を刊行。それまで男性の世界と思われていた川柳の世界に、女流の道を拓いた。

その後も剣花坊の良き伴侶^{はんりよ}として、内助の功に尽くし、昭和九年（一九三四）、剣花坊永眠。

一人去り二人去り仏と二人
は剣花坊追悼の句。

昭和十二年（一九三七）には剣花坊の没後廃刊されていた「川柳人」を

主宰として復刊。復刊したばかりの同誌に鶴彬^{つるのぶ}の有名な反戦句

手と足をもいだ丸太にしてかえし

などを掲載し、発禁廃刊処分、信子も拘置四日の憂き目に遭った。しかし勢いは衰えない。言論弾圧激しい昭和十五年（一九四〇）、七十一歳、信子一世の名句といわれるこの傑作が生まれている。『第二次戦争に平和を願って』の附注で

国境を知らぬ草の実こぼれ合い

戦後、昭和二十年（一九四五）、「川柳人」を復刊、精力的に活動を再開している。剣花坊をして「うちの女房は勲八等だからな」と慨嘆させた、その意志の強さは筋金入りだ。

愚痴を聞く相手になれと強いられる

男ならこいふ時に酔うだろう

別々の心で同じ飯を食ひ

など、女にとって不合理な制度を衝いていて痛快。やがて、念願の「川柳女性の会」を立ち上げて、第二句集「蒼空^{そうくう}」刊行。表現の自由さを許さぬ思想統制の加速の時代を批判した。昭和三十三年（一九五八）四月、八十八

▲萩市役所前に建つ剣花坊夫妻の句碑



※鶴彬（一九〇九～一九三八）

石川県高松町生まれ、本名・喜多。一二、反戦川柳作家。

「晩を抱いて闇にある審（つぼみ）」「手と足をもいだ丸太にしてかへし」など数多くの鋭い反戦川柳を詠んだ。反戦句をつくって戦争反対を貫くとともに、二十一歳で金沢歩兵第七連隊に入営すると、日本共産青年同盟の機関紙「無産青年」をもちこむなど反戦活動をし、治安維持法違反で懲役二年の刑に。ふたたび治安維持法違反で、東京の野方署に留置され、翌年、赤痢に感染、勾留を解かれないまま病院で死亡。享年二十九歳。

歳で死去。辞世は

草むしり無念無想の地を詰め

後に機関紙「川柳人」を引き継いだ御息女の大石鶴子さんは、母・井上信子について次のように語っている。「外見はなよなよしていても、心にはどうしても折れ曲がらない何かがありました。川柳も情熱で発散したものは少なく、どれも深い思索から、生まれ出たもののように感じます。

「川柳人」を引き継いだ御息女の大石鶴子さんは、母・井上信子について次のように語っている。「外見はなよなよしていても、心にはどうしても折れ曲がらない何かがありました。川柳も情熱で発散したものは少なく、どれも深い思索から、生まれ出たもののように感じます。

第二部 剣花坊句碑



▶孫と遊ぶ剣花坊夫妻

井上剣花坊 句碑案内図 (萩・まらじゅう句碑めぐり)





【江向3区 剣花坊誕生地】

明治3年6月3日、毛利家の譜代家臣「井上党」の一族としてここ江向に生まれ、幼名を七郎、のちに幸一と改めた。



剣花坊の句には母を詠んだものが多い。大正十四年、剣花坊五十五歳の時の句。句碑のある萩市江向の誕生地には、かつて「井上剣花坊誕生の地」の石碑だけがあつたが、後にこの誕生の地に相応しい句碑をといて建立された。選句・揮毫は野村興児萩市長。なお、妻信子の誕生地もこの句碑の近辺にあつた。

何よりも

母の乳房は

甘かりし

句碑① 江向 井上剣花坊誕生地(萩市民館南方に150m、増野家東側隣地の駐車場前)
建立者:井上剣花坊顕彰会・萩川柳会・萩ユネスコ協会・井上秀夫(用地寄付)

井上剣花坊 句碑建立一覧表(萩・まちじゅう句碑めぐり)

平成18年10月現在

記号	建 立 位 置	句 文	建立年月	建 立 者
①	江向 井上剣花坊誕生地 (萩市民館南方へ150m 増野家東側隣地の駐車場前)	何よりも 母の乳房は 甘かりし	平成 10. 5	井上剣花坊顕彰会 萩川柳会・萩ユネスコ協会 井上秀夫(用地寄付)
②	江向 萩市民館前 (市役所南側)	飛びついて 手を握りたい 人ばかり(剣花坊) 国境を 知らぬ草の実 こぼれあひ(信子)	昭和 45. 11	萩ユネスコ協会
③	国指定史跡 萩城下町 江戸屋横丁南側 (カフェテリア・異人館東前 慶安橋もと)	後五百年 凡胸生まれて 又千里	平成 9. 9	進藤 浩・芳枝
④	堀内 素水園(田中義一銅像) (萩博物館東前側 理容・サカエ西前)	憧れを 画がけと空は たゞ蒼し	平成 10. 5	長谷 智・智隆
⑤	堀内 萩城南門跡より南方50m 旧厚狭毛利家萩屋敷長屋の東隣地 (萩焼・堀之内臨苑西側)	突き進む にぎりこぶしへ 当る風(剣花坊) 八十年 洗ひ晒しに 堪えた生地(信子)	平成 9. 9	大庭 政雄
⑥	唐橋町 萩信用金庫本店前札場跡	親といふ 宝はみんな 持ってゐる	平成 9. 10	萩信用金庫
⑦	古萩町 長州屋光国製菓本舗前 (萩グランドホテル西側)	① 絶頂で 天下の見えぬ 霧の海 ② 見ただけで 碑文は読まず 皆通り	平成 10. 5	光国 忠史
⑧	浜崎 住吉神社境内 (正門の北側)	新しい 心になりぬ 初日の出 (剣花坊寄進の玉垣あり)	平成 10. 5	住吉神社
⑨	椿東 萩本陣史跡庭園内 (萩本陣にお尋ねください ☎22-5252)	黎明に ひとり坐って 神を待つ	平成 10. 2	松村建設㈱
⑩	椿 萩有料道路萩往還公園内	いっばいに よろこびを吸ふ 朝の窓	平成 10. 3	(社)萩物産協会
⑪	椿東(株)コープ葬祭前 (山口県経済連萩加工場東前)	結び切る やがてを落つる 花の露(剣花坊) 何もの、 在すか西の 懐かしさ(信子)	平成 10. 12	(株)コープ葬祭
⑫	唐橋町 ホテル好日館玄関前	名剣に なるに火に入り 水に入り	平成 16. 11	藤原 弘毅
⑬	堀内 萩博物館内 (正門東側庭)	巣立ちした あとのはじめの 二羽になり	平成 16. 11	井上剣花坊顕彰会会長 大庭 政雄
⑭	椿 陣ヶ原 忠小兵衛本店前	伊達巻で 朝とひとりの 飯を食い	平成 17. 1	長谷 俊次
⑮	椿東 松本 松陰神社境内 (松下村塾北側)	偉大なる 存在なりし 松下塾	平成 17. 4	松美屋醤油㈱ (故)松野 忠次
⑯	川島1区 鯉の藍塘川沿い (旧湯川家屋敷駐車場内)	紅葉ほど 小細工をせぬ ハッ手の葉	平成 17. 4	官野翠紅園㈱
⑰	堀内 菊ヶ浜 (山口県立萩看護学校北側)	活眼を ひらくとゴミが 眼にはいり	平成 17. 6	赤木 新吉
⑱	椿 (社)萩市観光協会横花壇内 (JRS萩駅前)	百までも 生きて百度の 大晦日	平成 17. 9	(社)萩市観光協会
⑲	椿 萩村田蒲鉾店前 (中国電力萩萩営業所北側)	幾億の 星の中なる 夫妻星	平成 17. 10	萩村田蒲鉾店
⑳	古萩町 萩グランドホテル正面玄関	あの船の どれにも帰る 港あり	平成 18. 3	萩グランドホテル
㉑	田町 御成道・たまち駐車場	永遠を 抱けばいのちも 暗からず	平成 18. 10	田町商店街 振興組合連合会



【南古萩町】

萩城下町ゾーンのちょうど入り口にあたる場所で、観光客の姿が絶えない。桂小五郎や高杉晋作など志士の旧宅に近い。



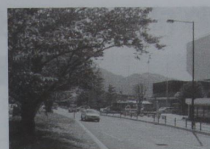
後五百年

凡駒生まれて

又千里

この句の剣花坊自筆の衝立が鎌倉の建長寺塔頭の正統院にあり、この寺院は剣花坊が晩年を過ごした場所。昭和九年、亡くなる年の正月の句。剣花坊、辞世の句でもある。

句碑③ 国指定史跡 萩城下町 江戸屋横町南側（カフェテリア異人館東前、慶安橋もと） 建立者：進藤 浩・芳枝



【萩市役所前】

句碑は市役所前の一角、萩市民館横の空地にある。この前を走る国道191号線沿道は桜の名所、また向かい側には、かつての藩校跡・明倫小学校がある。



飛びついて

手を握りたい

人ばかり（剣花坊）

全国各地を川柳行脚した剣花坊、ふるさとの萩にも再々立ち寄った。久々に萩の地で出会った懐かしい友人知人との再会に、感激を込めて即興で詠んだと言われる。大正十年、剣花坊五十一歳の句。一方、信子の句は赤十字の看護婦として従軍経験のある彼女の平和への想いが込められている。

国境を

知らぬ草の実

こぼれあひ（信子）

句碑② 江向 萩市民館前 建立者：萩ユネスコ協会



【旧厚狭毛利家萩屋敷長屋】

厚狭毛利家は毛利元就の5男元秋を始祖とする毛利氏一門。現存する萩の武家屋敷の中では最も大きく、国の重要文化財に指定されている。



突き進む

にぎりこぶしへ

当たる風 (剣花坊)

剣花坊の没後、機関誌「川柳人」の発行を引き継いだ剣花坊の次女・大石鶴子さんに相談し、彼女に選んでもらった十句から、建立者の大庭氏が選句。昭和四年、剣花坊五十九歳の句。信子の句と仲良く並んで刻まれている。

八十年

洗ひ晒しに

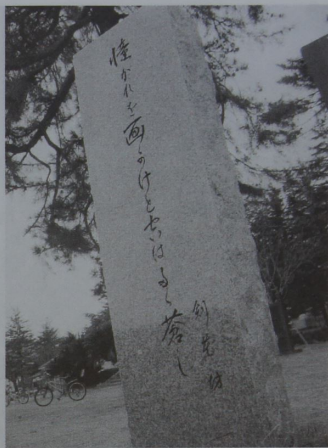
堪えた生地 (信子)

句碑⑤ 堀内 萩城南門跡より南方50m 旧厚狭毛利家萩屋敷長屋の東隣地 (萩焼・堀之内陶苑西側) 建立者：大庭政雄



【素水園】

かつて殿様が通った御成道沿いにある小公園。田中義一の銅像が目印。隣接地には、平成16年に開館した萩博物館がある。



憧れを

画がけと空は

ただ蒼し

澄み渡る爽やかな空と陽光が眼に浮かぶ、とても明るくストレートな句。昭和六年、剣花坊六十一歳の句。句碑のある素水園には首相 (昭和二年)・陸相・陸軍大将を歴任した田中義一の銅像があり、大空にそびえる大きな銅像とうまくマッチングしているように思える。

句碑④ 堀内 素水園 (田中義一銅像) (萩博物館東前側 理容サカエ西前) 建立者：長谷 智・智隆



【野山獄・岩倉獄】

藩政時代の獄屋敷。
野山獄跡には十一烈士の碑、岩倉獄には重輔絶命の詩碑と松陰が重輔に与えた詩碑が建てられ、萩藩の波乱に富んだ維新当時を偲ぶことができる。



絶頂で

天下の見えぬ

霧の海

野山獄・岩倉獄の近く、萩焼のお店や土産店が軒を並べる古萩町の表通り、長州屋光国製菓本舗前に句碑がある。作句は大正十二年と昭和二年の句。
「見ただけで・・・」の句は、平成十年、句碑の合同完成式で萩の地を訪れた剣花坊の孫、井上堯氏が、「剣花坊のニヤリとした顔が見えるよう」と機関紙・川柳人八〇〇号に書かれている。

見ただけで

碑文は読まず

皆通り

句碑⑦ 古萩町 長州屋光国製菓本舗前（萩グランドホテル西側）建立者：光国忠史

【札場跡】

萩往還の起点。藩政時代の札場は、防長両国の一里塚の基点ともなっており、一里塚の位置を示すのに、多くは「従萩唐樋札場〇〇里」と書く例になっていた。また札場では、罪人のさらしも行われた。



親といふ

宝はみんな

持ってる

数多い句の中でも非常に人気が高い句。「子は宝」というフレーズは普通に口にするが、親を宝とした感覚はとても新鮮。防長両国の一里塚の基点ともなった萩往還の起点「唐樋^{かひ}札場跡」に句碑はある。大正七年、剣花坊四十八歳の作句。この年に剣花坊の母タニが八十歳で死去している。

句碑⑥ 唐樋町 札場跡（萩信用金庫本店前）建立者：萩信用金庫



【奥萩本陣温泉】

吾妻山麓全体にホテルの施設が広がり、展望台・史跡庭園・温泉がある。モノレールで行く露天風呂として人気を集めている。



黎明に
ひとり座つて

神を待つ

剣花坊五十七歳、昭和二、三年頃の句。句碑はホテル萩本陣の史跡庭園内にあり、もともとその地にあった五十トン級の自然石に刻まれている。剣花坊句碑のなかで最大級のもの。その句碑の背後には、法華宗の御堂が奉られており、この神妙なムードの句にとっては、最高のロケーションといえる。

句碑⑨ 椿東 萩本陣史跡庭園内 建立者：松村建設株式会社



【住吉神社】

万治2年(1659年)の創建。ここを起点に行われるお船謡は重要無形文化財。藩主が御船謡舸子組(地謡組)をして神社祭事に毎年奉納演奏され、今日まで口伝により伝承されている。



新しい

心になりぬ

初日の出

大正元年の正月に詠んだ句。住吉神社の神職を代々つとめてきた中津江家は、剣花坊の妻・信子と姻戚関係。同家の中津江伊・佐奈氏も萩川柳会の初代会長をつとめ、句会の会場ともなった。同神社の境内には、剣花坊が寄贈した記銘入りの玉垣が今も残っている。また剣花坊自筆の屏風など貴重な史料が同家で大切に保管されているなど、剣花坊との関わりが深い。

句碑⑧ 浜崎 住吉神社境内(正門の北側) 建立者：住吉神社

【松本川河畔】
句碑のある場所から徒歩3分で松本川の河畔に出る。早春3月には、藩政時代からの伝統漁「しろうお四手網漁」が見学できる。



何ものの
在すか西の

懐かしさ (信子)

結び切る
やがてを落つる

花の露 (剣花坊)

昭和七年の作句。句碑の候補として「短命の 相 だった九十九で死ぬ」(剣花坊)や「ひとり去り ふたり去り 仏と二人」(信子)という句もあった。信子の句は、作句年不明。句碑はコープ葬祭前にあり、筆は野村萩市長による。

句碑11 椿東 コープ葬祭前 建立者：株式会社コープ葬祭

【萩往還公園】
明治維新の原動力となった吉田松蔭や高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允などの群像が並ぶ。展示施設「松陰記念館」は入場無料。



いっばいに
よろこびを吸ふ

朝の窓

さんさんと降り注ぐ朝日、それを受けて輝く窓ガラス、そんな明るい朝の風景がいきいきと眼に浮かんできそう。句碑のある道の駅・萩往還公園は、萩市の入り口、萩有料道路料金所に隣接し、吉田松蔭をはじめ明治維新の志士たちの像とともに、剣花坊の句が、萩への観光客をお迎えする。

句碑10 椿 萩有料道路萩往還公園前 建立者：社団法人萩物産協会



【萩博物館】

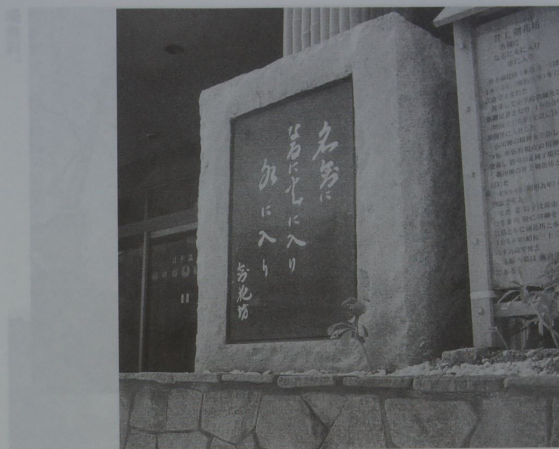
萩博物館は「萩まちじゅう博物館」拠点となる施設であり、萩の自然や歴史、民俗、文化などあらゆることが学べる機能を持っている。



萩立ちした
あとははじめの
二羽になり

平成十六年（二〇〇四）十一月に開館した萩博物館の庭園に建立するため、約二四〇〇句の剣花坊全句集の中から野村萩市長が時間をかけて選んだ一句。大正十、十一年頃の作。

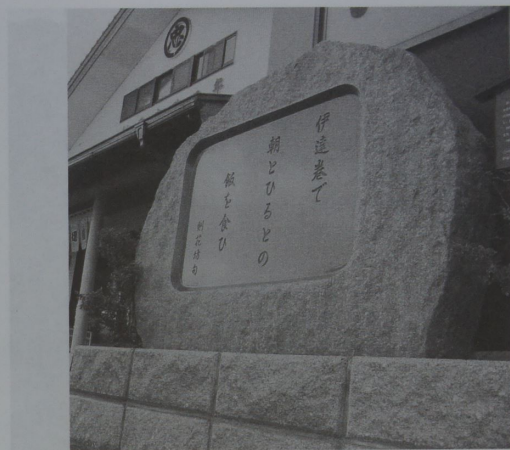
句碑13 堀内 萩博物館内（正門東側庭園）建立者：井上剣花坊顕彰会会長 大庭政雄



名剣に
なるに火に入り
水に入り

刀を鍛造する過程で、刀身は何度も繰り返し灼熱の焔火をくぐり、そして焼き入れで冷水に浸される。人間も同じで、厳しく鍛えられてはじめて立派な人格が出来る。人生訓ともいえる句。剣花坊五十三歳 大正十一、十三年頃の作句。建立者 藤原弘毅氏が迷うことなく選んだ一句。

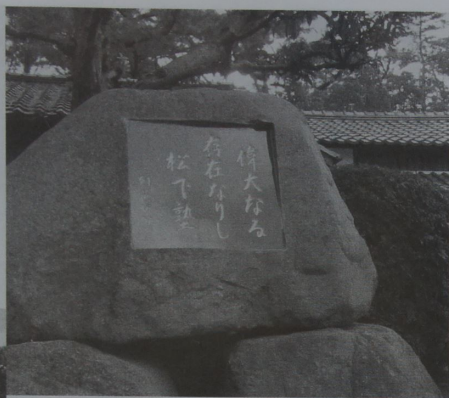
句碑12 唐樋町 ホテル好日館玄関前 建立者：藤原弘毅



伊達巻で 朝とひるとの 飯を食ひ

山口市方面から萩の市街地に入る玄関口、椿陣ヶ原にある大手蒲鉾製造販売・忠小兵衛本店前に句碑はある。大正十四、十五年、剣花坊五十六歳頃の句。

句碑14 椿 陣ヶ原 忠小兵衛本店前 建立者：長谷俊次



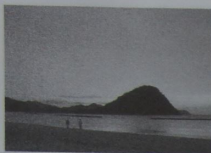
偉大なる 存在なりし 松下塾

萩を訪れる観光客の大半が訪れる松陰神社。その境内に、かつての志士たちを育んだ松下村塾があり、句碑は塾の建物の裏手に立つ。剣花坊の句や、「川柳を始める人へ」などの著作にも、少なからず吉田松陰の影響を垣間見ることができる。剣花坊五十七歳、昭和二、三年頃の作句。



【松陰神社】
吉田松陰を祭神とする神社。境内には国指定史跡の松下村塾、吉田松陰幽囚の旧宅などがある。

句碑15 椿東 松本 松陰神社境内 (松下村塾北側) 建立者：松美屋醤油 松野忠次



【菊ヶ浜】

古くは阿武の松原として和歌にも詠まれた景勝地。指月山を左手に、島々が浮かぶ青い海が目の前に広がり、特に夕陽の眺めが素晴らしい。



活眼を

ひらくとゴミが

眼にはいり

争いを避けることをせず、正面からぶつかっていった剣花坊の姿が彷彿とする。大正十二、十三年頃の作句。句碑は菊ヶ浜海岸に建ち、白砂の浜と沖合いの島々を一望できる一等地にある。建立者は、長年この菊ヶ浜の清掃に励み、読売新聞社が主宰するニューエルダーシチズン大賞に輝いた赤木新吉氏。

句碑17 堀内 菊ヶ浜（山口県立萩看護学校北側）建立者：赤木新吉



【旧湯川家屋敷】

藍場川沿いにある藩政時代の武家屋敷。川沿いに長屋門があり、屋敷の中には橋を渡って入る。藍場川沿いの民家では環境問題に配慮した水の利用法を見ることができ、しかもその技術が優秀である。



紅葉ほど

小細工をせぬ

八つ手の葉

八つ手は成長は遅いものの、株分けや挿し木でも良く育ち、日陰にも強い。晩秋には可愛い黄色の花を付け、「花八つ手」は冬の季語、俳句に詠まれることが多い。大正七、九年頃の句。萩の三角州を東西に流れるかつての運河、今は鯉が遊ぶ藍場川の畔・旧湯川家屋敷前に立つ。

句碑16 川島 藍場川沿い（旧湯川家屋敷駐車場内）建立者：官野翠紅園有限会社



幾億の

星の中なる

夫妻星

昭和七年、剣花坊六十二歳の時の作句。夫婦星とは、おとめ座のスピカとうしかい座のアルクトウルスのこと。春の宵に仲良く昇り目立つ星であることから、春の夫婦星と呼ばれている。

句碑19 椿 村田蒲鈴店前（中国電力萩営業所北側）建立者：株式会社村田蒲鈴店



【萩駅】

大正14年に洋館駅の傑作として建てられた登録有形文化財の萩駅舎は平成10年（1998）に復元、萩の美しい自然や歴史を紹介する展示館として公開されている。



百までも

生きて百度の

大晦日

昭和六年 剣花坊六十一歳の作句。同年の句に「寝る時を 寝ずに人生 百二十年」「短命の 相だつた九十九で死に」など齢を詠った句が多い。句碑はJR山陰線萩駅前のロータリー、夏みかんの植栽に隣接して立つ。

句碑18 椿 JR山陰線萩駅前（萩市観光協会横の花壇）建立者：社団法人萩市観光協会



あの船の
どれにも帰る
港あり

現萩市街のほぼ中心部にある萩グランドホテルの
玄関に句碑は立つ。二十基目の剣花坊句碑。かつて
北前船の寄港地として栄え、今も日本海への玄関口
である港町萩に相応しい句。

句碑② 古萩町 萩グランドホテル 正面玄関 建立者：萩グランドホテル



永遠を
抱けばいのちも
暗らからず

平成十八年十月一日にオープンした「御成道・た
まち駐車場」に二十一基目の剣花坊句碑が建立され
た。「肉体は滅びても魂は生き続ける」とする剣花
坊の死生観を表現している。この句碑の揮毫は、井
上剣花坊顕彰会会長として句碑の建立に尽力し、本
編の監修者でもある大庭政雄氏による。

【田町商店街】
萩市の中心市街地にある商店街。地元
市民だけでなく、観光客も楽しめる観光
ミックス型の商店街をめざす。毎年十月
には萩焼祭りが開催され、多くの観光客
で賑わう。



句碑① 田町 御成道・たまち駐車場の入り口 建立者：田町商店街振興組合連合会

井上剣花坊年譜

明治三年	(一八七〇)		六月三日、山口県萩町江向三区(現・萩市)に生まれる。本名幸一。父は萩藩士、井上吉兵衛(采祐)。母タニ。
明治七年	(一八八四)	一四歳	家貧しくて独学で小学校の教員となり、傍ら神代大介の遊竜塾で漢学を学び、塾頭にまでなる。
明治十年	(一八八七)	一七歳	東京に遊学、従兄の男爵寺島秋介邸に寄食したが、翌二十一年病気で帰郷。
明治三年	(一八九〇)	二〇歳	萩郊外、山田村の木間(こま)小学校で教鞭を執る。
明治四年	(一八九一)	二一歳	父吉兵衛(采祐)七月五日死去(六一歳)。
明治五年	(一八九二)	二二歳	山口県糸米小路に母を連れ転居。三つ年上の土族の娘、山縣トメと結婚。トメの両親は共に美濃派の俳人であった。山口で発行された『鳳陽新報』の記事となる。一九年二月五日号からは編集人。当時、秋剣と号していた。
明治二年	(一八九八)	二八歳	三男が生まれたが、産後の肥立ちが悪く、一月二十日、妻トメ死去。
明治三年	(一八九九)	二九歳	岡信子(旧萩藩士、岡正の長女。山口県病院の看護師)と再婚。
明治三年	(一九〇〇)	三〇歳	三人の子を母に預け、夫婦だけで上京。雑誌『明義』の記者となり、文芸欄を担当。
明治五年	(一九〇二)	三二歳	新潟県高田の『越後日報』より招かれ主筆となる。
明治六年	(一九〇三)	三三歳	『越後日報』を辞め、上京、日本新聞社に入る。主筆古島一雄の勧めで、剣花坊の号で七月三日より「新題柳樽」を掲載。
明治七年	(一九〇四)	三四歳	二月、日露戦争が始まる。九月、妻信子が従軍看護師として応召。
明治八年	(一九〇五)	三五歳	七月三日、柳樽寺川柳会を結成。一月三日、機関紙『川柳』を発行。
明治四〇年	(一九〇七)	三七歳	日本新聞社の幹部となり多忙のため、一四号で『川柳』休刊。

明治四二年	(一九〇九)	三九歳	日本新聞社を退社し、客員となって引き続き川柳欄を担当。八月『国民新聞』の川柳欄も担当。
明治四五年	(一九一二)	四二歳	四月『読売新聞』川柳欄担当(大正一〇年四月まで)。八月『川柳』を『大正川柳』と改題して発行。
大正二年	(一九一三)	四三歳	二月、司馬遼正の名で、『拙者は大石内蔵助ちゃ』を帝国軍人後援会から刊。
大正三年	(一九一四)	四四歳	『赤練々の大石良雄』を啓文堂書店より刊。
大正四年	(一九一五)	四五歳	日本新聞社の客員を辞し、全国川柳行脚に出ること多し。
大正五年	(一九一六)	四六歳	七月、三越で川柳賛画展を開く。
大正六年	(一九一七)	四七歳	十月、南北社から『新川柳六十句』刊。
大正七年	(一九一八)	四八歳	十一月、母タニ死去(八十歳)。
大正八年	(一九一九)	四九歳	九月、南北社から『川柳を作る人に』刊。
大正一〇年	(一九二一)	五一歳	『大正川柳』創刊一〇周年を記念し、全国川柳大会を開催。
大正一二年	(一九二三)	五三歳	四月、剣花坊句集『習作二十年』を柳樽寺川柳会から刊。九月一日、関東大震災に遭い自宅も焼失。
昭和二年	(一九二七)	五七歳	『大山川柳』を『川柳人』と改題。剣花坊編『大正川柳句集』刊。
昭和四年	(一九二九)	五九歳	『川柳人』に『川柳王道論』を連載。六月、『川柳人』通巻二〇〇号。
昭和五年	(一九三〇)	六〇歳	『川柳百七十年史』の執筆に専念。
昭和八年	(一九三三)	六三歳	『京都帝国大学新聞』に「無産者としての新川柳」を発表。軽い脳溢血で禁酒。
昭和九年	(一九三四)	六四歳	三月一九日、病をおして帰郷。夜、萩市公会堂で二時間半にわたり「藩論統一の歴史」と題し講演。九月四日、鎌倉建長寺内の正統院に滞在中、脳溢血でたおれ、一日朝逝去。二三日同寺で葬儀。法号、剣花院帰幸道一居士。十一月八日、剣花坊追悼全国川柳大会が催される。

(提供・和田 健氏)

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

■シリーズ「萩ものがたり」既刊タイトル

タイトル名	著者	定価
①萩の椿	吉松茂	600円
②高杉晋作100問100答	一坂太郎	500円
③萩開府一毛利輝元の決断一	北村知紀	600円
④萩まちじゅう博物館	西山徳明	600円
⑤松陰先生のことば一今に伝わる志一	萩市立明倫小学校監修	500円
⑥密航留学生「長州ファイブ」を追って	宮地ゆう	600円
⑦萩と日露戦争	一坂太郎	500円
⑧萩の巨樹・古木	草野隆司	600円
⑨吉田松陰と現代	加藤周一	600円
⑩萩沖の魚たち（春・夏編）	中澤さかな／堀成夫	600円
⑪萩の史碑	一坂太郎	500円
⑫山田顕義一法治国家への歩み	秋山香乃	600円
特別編 ますらをたちの旅【長州ファイブ物語】	一坂太郎	600円

販売所／萩市役所受付・萩博物館・萩市観光協会・明屋書店・道
※郵送でのご購入は、萩ものがたり編集部まで電話・FAX・Eメール

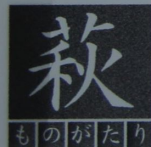
萩ものがたりは、定期購読が

年会費2,000円にて、年間4タイトル（4・10

* 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料！

お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号、インターネットでの申込みもお受け

会費のお支払い方法 申込みと同時に郵便振替用紙をお届けし、銀行からの口座引き落としでもできます。



有限責任 萩ものがたり
中間法人

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地

TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458

http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/story/index.html

E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

落丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

刊行のことば

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など「宝物」ともいふべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

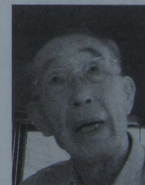
毛利輝元が安芸の国（広島県西部）から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年（二〇〇四）は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多彩な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願ってやみません。

【監修者 略歴】

大庭政雄



大正三年一月萩生まれ。明倫小・萩中を経て、南滿州工業専門学校（中国・大連市）にて建築工を学ぶ。昭和十年南滿州鉄道に入社、昭和二十一年に復員して日産建設㈱入社、主要都市の支店長・本社営業本部長を歴任し、昭和五十年に日産住宅㈱の常務取締役就任、昭和五十八年退職、現在、萩土建㈱非常勤顧問。㈱全日本川柳協会常任幹事、萩川柳会名誉会長、井上剣花坊顕彰会会長、菊ヶ浜を日本一美しくする会会長、山口県文化功労賞、全日本川柳協会功労賞を受賞多数。
平成十八年九月二十七日、永眠。

定価 600円 (本体571円+消費税29円)

川柳を民衆詩として文芸の域に高め、
その精力的な活動を持って「川柳中興
の祖」と呼ばれた井上剣花坊。

この川柳界の巨人が、萩の出身である
ことは、地元萩市民の間でもあまり知
られていませんでした。

一部で、新川柳界の総帥と仰がれた剣
花坊の生涯を、二部で、萩市内二十一
箇所にある、剣花坊の句碑を紹介して
います。



萩市立萩図書館



110910106

Vol ⑬

川柳中興の祖

井上剣花坊

2006年 11月1日 第1刷発行

監修 大庭政雄

発行者 野村興兒

発行人 有限責任中間法人 萩ものがたり

印刷 有限会社マシヤマ印刷

14

萩

ものがたり